

「クナシリ・メナシの戦い」その後について

はじめに

これまで14回にわたり、松前藩士・新井田孫三郎が記した「寛政蝦夷乱取調日記」から、「クナシリ・メナシの戦い」の事件概要を見てきました。

戦いの主たる原因是、場所請負による利益で回収しようとして、クナシリ・メナシ地方においてメ粕（煮魚から油水分を搾つた残りを肥料とした）生産を導入し、アイヌの人々に対し、さらに女性に対し非道

な扱いをしたことにより、アイヌの人々から反撃を招いたというものでした。

松前藩は寛政元年（1789）6月に、これを鎮め

るために城下で華々しい凱旋行列が行われましたが、蝦夷騒乱が各所に伝えられると様々な風評が立ちました。幕府はこの戦いで、ロシア人が参加したとする風評に関心を示し、直ちに松前藩に尋問書を発し、さらに「間者（隠密）」を派遣して、蝦夷地・千島・樺太の各地を探索しました。

これに同行することになり、7月15日に福山に入り、東西を分担して蝦夷地を廻り、9月には福山に帰りました。江戸に戻って報告書を起草し、11月3日には俊蔵・五太夫の連名で勘定奉行の久世丹後守に提出しました。

しかし、この報告書の資料によって、俊蔵が福山に滞在中、松前藩老臣の依頼により、乱後の処置について助言していただきました。これがしてしまいました。これが幕府の老中、松平定信の逆鱗に触れ、翌年正月に俊蔵は揚屋（牢獄）に入れられ、獄中死してしまいます。徳内も同時に入牢しますが、後に無罪となり、普請役に抜擢され、寛政3年に徳内らは千島を調査しました。

松前藩はこの改正により、松前藩領民ではない飛驒屋久兵衛が請け負い、エトモ・アッケシ・キイタツフ・クナシリ・ソウヤの5場所についてこれを取りやめ、祖父の代から福山の町人となり、屋号を「阿部屋」とする村山伝兵衛に、これらの場所のアイヌの介抱をするよう命じました。

この時、気候はすでに寒冷に向かい、介抱品の輸送が困難でしたが、石狩など「阿部屋」が請負っていた場所のアイヌを使い、陸路などを利用して、ソウヤ方面やアッケシ・キイタツフ方面に介抱品運搬し、5場所のアイヌを安堵させました。

この騒乱にロシア人が加担していたとする風評があり、幕府は寛政元年（1789）6月26日、南部・津軽・八戸の3藩に対し、松前藩から要請があつた場合、直ちに支援の出兵を行うように指示を出しますが、7月21日には「取仕舞」したので、他

藩が出征することはありませんでした。

また、幕府は情報収集のため、幕府の普請役であつた青島俊蔵を長崎俵物御用掛になりすませて蝦夷地に遣わし、小人目付の笠原五太夫も商人として俊蔵に随行させました。さらに、当時野邊地に居た最上徳内も

この騒乱にロシア人が加担していたとする風評があり、幕府は寛政元年（1789）6月26日、南部・津軽・八戸の3藩に対し、松前藩から要請があつた場合、直ちに支援の出兵を行うように指示を出しますが、7月21日には「取仕舞」したので、他

藩が出征することはありませんでした。

また、幕府は情報収集のため、幕府の普請役であつた青島俊蔵を長崎俵物御用掛になりすませて蝦夷地に遣わし、小人目付の笠原五太夫も商人として俊蔵に随行させました。さらに、当

時野邊地に居た最上徳内も

救済交易と調査

幕府は、寛政元年の戦い以来途絶えていたアイヌとの交易について、信頼回復のため幕府が直接模範的な交易を試みたため、寛政3・4年に「御救」交易の名をもつて、蝦夷地の内数か所で実施しました。また、同時に千島・樺太の状況も調査しました。

寛政3年正月に、普請役最上徳内らが福山に着き、徳内らは千島のエトロフ・ラツコ島などを調査し、同じく田邊安蔵らが厚岸で交易をして帰りました。寛政4年には宗谷と石狩で交易を行い、徳内らは樺太調査を行い、これにより、松前藩士による外国密通の嫌疑が掛けられました。